二〇一〇年三月三〇日（参加者一六名）

堤防を下りて上りて花めでる　かれん
のどけしや路面電車の一笛も　〃
花筵どくろのシャツもその中に　〃
初ひばり空の高さを唄ひけり　よし子
見本より小さき飯蛸駅弁当　〃
スカートのスリット深し春の風　〃
現し世を駈けて今ある花の下　宏虎
春岬馬柵に寄り添ふ母子馬　〃
春風や埠頭に白き異国船　ひかり
料峭や海一望の観艦碑　〃
春愁や路面電車のきしむ音　ぽんこ
背くらべしてをるごとくつくし伸ぶ　〃
手のひらのメモ消えてをる四月馬鹿　つくし
つまずけばさっと夫の手夕桜　〃
白壁に花影つづる屋敷町　菜々
花堤行くどこまでも空青し　〃
彼岸寒四天王寺を車中より　きづな
ゼミ仲間女が仕切る花筵　〃

新しき自転車軽ろし草萌ゆる　はく子
花冷や貨物列車の長々と　〃
いかなごを炊きて息災伝へけり　わかば
千木の先ほろほろ濡らす春しぐれ　明日香
コンダクター踊るが如く春の曲　こすもす
参道を上へ上へと桜愛づ　百姓
きらきらと日を撒きちらす春の雪　小袖
老幹に吹き出て花を咲かせけり　満天
ペン先の逡巡として春眠し　〃

定例句会みのる選

二〇一〇年三月三〇日（参加者一六名）